

大学院ニュースレター

久留米大学大学院医学研究科

第103号 / 2022年6月27日発行

編集 / 医学研究科長

『“看護の基本は観察にあり”の追究』

看護学科 教授 森本 紀巳子

看護学は、さまざまな専門領域に分けることができます。「基礎看護学」はその出発点となり、どの専門領域にも通じる「看護の基盤となる学問」です。つまり、看護を实践するうえでの土台となる概念や方法論を探求する学問で、私は、看護学科では「看護学概論」や「基礎看護技術」などの科目を担当しています。研究も、看護学の初学者にどのように看護や看護技術を伝えたらよいかという問いから、看護技術の教育方法をテーマに、「看護者の観察技術—観察行動の実態—」と「行動分析による基礎看護技術教育」に取り組んできました。今回は、「看護者の観察技術」について紹介します。

「看護は観察に始まり観察に終わる」といわれており、相手を理解しようとする姿勢でじっくり観察し、得られた情報を基に、療養生活をサポートします。研究のねらいは、アセスメントに活用する観察情報の量と質が、その後の看護実践を左右すると考え、観察技術を初学者の学生にどのように伝えたら身につけられるのか、教育方法を探ることでした。そこで、看護師の観察行動の実態を把握することから始めました。観察情報の70~80%を占めるといわれる視覚情報に着目して、看護師の視線の動きを眼球運動測定装置等の機器を用いて測定し、視線をおいた部位（顔、手、服、点滴ボトルなど）の注視時間、注視回数、注視順番を分析しました。患者と家族が病室で会話している静止画面をテレビモニターで観てもらった時、看護学生は患者を中心に、看護師は医療機器・器材を中心に観る傾向がありました。大学院生の研究では、患者（モデル人形）に対して看護実践をしてもらい、2年目と中堅看護師の視線の動きを測定しました。看護経験に関わらず、観察する部位、観察しない部位が同じで、観察不足がみられました。ナイチンゲール看護論では、「正確な判

断を阻むのは、観察不足となんでも平均をとって良しとしてしまうこと」と、述べられています。

看護師の仕事には、診療の補助行為と療養上の世話があります。療養上の世話は、療養中の患者に対して、病状の観察をしながら食事や排泄、更衣、清潔の保持など日常生活の援助をさします。これらは看護師の臨床的判断により実施され、患者が受けている生活行動の制約や制限に対して、自立に向けた援助が行われます。患者の身近にいる看護師の医療における重要性は、「患者ひとり一人の様子や状態をいつも把握し、異変を察知できるようにしておく」ことで、患者との意思疎通や状態観察とおした精神的支援も含まれます。「いつもの状態」からの変化を観察するのは、看護師だと思います。特に、患者の身体に触れる清拭では、時間をかけて皮膚の状態や身体の動きを観察し、声や表情・会話の内容から患者の気持ちが観察できます。ここで、看護師の専門家としての観察の能力が必要となり、他職種と共有する看護師ならではの観察情報を提供します。

研究を重ねるごとに、「看護の基本は観察にあり」の教育の難しさを痛感しています。もちろん、看護師の観察行動は視線の動きだけではわかりませんので、まだまだ、研究を継続しなければなりません。

最後に、あるテレビ番組に「光学的・身体的変換視野の効果（股のぞき効果）」で2016年イグ・ノーベル賞受賞の東山篤規教授が出演され、視覚による空間知覚の実験を楽しく説明し、次のように話されましたので記します。「基礎研究は役に立つか、立たないか、そういった基準ばかりで物事を判断するばかりが道ではない。研究者がワクワクする単純な興味は、のちに計り知れない原動力を生むことができる。」

『Authorship』

臨床研修センター 教授 高森 信三

私は久留米大学を1983年に卒業し1年目を大学病院にて、2年目を国立東京第2病院（現 東京医療センター）にて研修しました。その後は数ヶ所の関連病院にて外科の医員として勤務した後に掛川暉夫教授が主宰されていた第一外科の呼吸器外科グループに配属が決まりました。呼吸器外科を専攻することとなった私は当時の上司であった林明宏先生の勧めもあり1988年より国立がんセンター研究所病理部にて肺病理の研修を行う機会を得ました。

当時の病理部の部長は肺病理で御高名な下里幸雄先生で、スタッフには若き日の野口雅之先生（後に筑波大学病診断理学教授）や松野吉宏先生（後に北海道大学病院病理部教授）が在籍しており一緒に顕微鏡を覗いていたのが懐かしく思い出されます。

立場としては久留米大学の外科学教室から肺癌の病理をテーマに乙号の医学博士論文を作成するための国内留学という形でした。たまたま、肺の腺扁平上皮がんの症例を鏡顕していた時でしょうか、下里先生からの指示があり腺扁平上皮がん症例をレビューすることになりました。

その結果、“Clinicopathologic characteristics of adenosquamous carcinoma of the lung”というタイトルでCancer (67, 649-654, 1991) に論文が掲載されました。初めての英語論文でしたのでごく苦勞しましたが、兄弟子みたいな上司であった野口雅之先生に懇切にご指導いただきました。投稿に必要な病理写真をフォトセンターの方をお願いして撮影して頂いた写真の鮮明さに驚嘆しましたが、この方は写真関係の仕事で受賞歴があるとのことでした。また、予後調査については肺外科のスタッフであった呉屋朝幸先生（後に杏林大学外科教授）に短期間のうちに精力的にご協力いただきました。

統計解析に関しては臨床疫学部の津金昌一郎先生

（後に国立がんセンター 社会と健康研究センター長）に多変量解析をして頂き、解析結果が目の前に次々と印刷されてきたのに驚きました。その時の津金先生のしなやかなタイピングが今でも鮮明に記憶にあります。下里先生からは細部にわたり厳しくも真摯なご指導を受け、“Corresponding author”ということばを初めて知りました。多くの優れた先生方のご指導、ご協力で完成した仕事で、一人じゃ何も出来ていない感に満たされました。やっと投稿論文が完成し掛川先生のところへ共著者の署名を頂きにいったところ「共著者に何故私の名前が入っているの？」と聞かれましたので、「下里先生（慶応義塾大学で掛川先生の後輩で旧知の仲とのこと）に掛川先生（派遣元大学の責任教授として）のお名前も入れるように指示されたからです」と答えました。

掛川先生は「私はこの仕事はみていないよ」と言われ、私は返答に困り「……、すみません」と答えた様に記憶しています。兎も角、署名は頂きました。今考えれば“Authorship”のことでしょうが当時は共著者についてあまり云々されておらず、掛川先生の仕事に対する清廉な姿勢が心に刻まれました。

その後、呼吸器外科に関連した臨床研究や動物実験また共同研究もそれなりに行いました。それらの研究結果が論文になるときは共著者の“Authorship”について考えましたが、現実的には清廉とはいかなかったような気がします。私も一度は「私はこの仕事はみていないので、共著者から外して下さい」と言ってみたかったものですが、それも叶わぬままに定年を迎えることになりそうです。“Authorship”よもやま話として一読して貰えれば幸いです。

～NEWS～



◆大学院医学研究科 facebook をご利用下さい

2017年3月から大学院医学研究科の公式 facebook を立ち上げています。大学院生のみならず広く地域の方へ大学院の活動をお知らせしています。企画として「修了生インタビュー」や「在学生インタビュー」を実施し、修了生や在学生の生の声をお届けしています。院生にとっても、これから大学院を目指そうと考えている方にとっても、大変有意義な内容となっています。医学研究科ホームページやニュースレターでも配信していきますので、是非ご覧ください。今後、院生のみなさまにインタビューをご依頼することもございますが、何卒ご協力の程お願いいたします。

FB : <https://www.facebook.com/kurumeugsm/>



HP : <https://www.kurume-u.ac.jp/site/gmed/shosaiart753.html>



◆第8回研究発表会の日程が決定しました

修士課程1、2年生希望者及び博士課程原則2、3年生を対象とした研究発表会が今年度も12月5日（月）・6日（火）に開催されます。エントリー受付期間は7月1日（金）～8月12日（金）です。ご自身の研究の進捗状況を把握し、客観的なフィードバックを得ることができる好機ととらえ、ふるってご参加ください。詳細が決まり次第、順次周知してまいりますので乞うご期待ください。

事務通信



◆現住所が変更になったら・・・

現住所が変更になりましたら、必ず「学生現住所変更届」の提出が必要です。なお、メールアドレスや電話番号が変更になった場合も、教務課までご連絡ください。

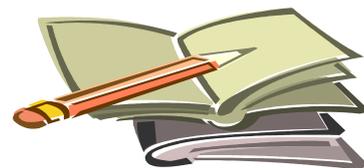
重要な書類がお手元に届かない場合がありますので、ご協力よろしくお願ひいたします。

(※「学生現住所変更届」は大学院HPよりダウンロード可)

<https://www.kurume-u.ac.jp/site/gmed/shoshiki-index.html>



◆令和4年度 大学院セミナーシリーズ（特別講義） カリキュラムのお知らせ



担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
高度救命救急センター	7月14日（木） 17:00～18:30	基礎3号館1階 セミナー室	近藤 久禎 先生 （厚生労働省 DMAT 事務局 次長/ 国立病院機構本部 DMAT 事務局 次長）	我が国の災害医療 ～近年の DMAT の活動について～

担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
内科学講座(内分泌代謝内科部門)	7月21日(木) 15:30~17:00	基礎3号館1階 セミナー室	諸橋 憲一郎 先生 (九州大学大学院医学研究院 分子生命科学系部門 性差生物学講座 教授)	骨格筋の性差とエネルギー代謝
公衆衛生学講座	7月21日(木) 18:00~19:30	基礎3号館1階 セミナー室	片岡 仁美 先生 (岡山大学病院ダイバーシティ推進センター、岡山大学病院総合内科・総合診療科 教授)	働き方改革とダイバーシティ推進の接点
内科学講座(腎臓内科部門)	9月15日(木) 17:00~18:30	基礎3号館1階 セミナー室	金崎 啓造 先生 (島根大学医学部内科学講座第一教授)	カテコール代謝不全がもたらす健康被害の分子機構
神経精神医学講座	9月16日(金) 17:00~18:30	基礎3号館1階 セミナー室	八木 朝子 先生 (医療法人愛仁会 太田睡眠科学センター 技師長)	睡眠脳波のマイクロ構造分析～覚醒反応と cyclic alternating pattern (CAP)
内科学講座(心臓・血管内科部門)	9月22日(木) 17:00~18:30	基礎3号館1階 セミナー室	下川 宏明 先生 (国際医療福祉大学大学院 副大学院長・教授)	目に見えないものの大切さ
外科学講座	11月10日(木) 時間は未定	教育1号館4階 1401教室	藤原 俊義 先生 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器外科学 教授)	未定
皮膚科学講座	11月14日(月) 18:00~19:30	基礎3号館1階 セミナー室	玉井 克人 先生 (大阪大学大学院医学系研究科 再生誘導医学寄附講座 教授)	発生と再生をつなぐ再生誘導医薬開発
病理学講座	未定			

※今後の予定を掲載しています。

開講日時・講義会場等の変更がある場合には変更後の情報、ならびに未定の日程については決定後、大学院医学研究科ホームページで情報提供いたします。

また、当該科目履修者は5回以上のセミナー出席およびレポートの提出をお願いいたします。

レポートについては、各セミナー終了後1週間以内に、医学部事務部教務課までご提出ください。

履修者以外の方も自由聴講が可能ですので、是非ご参加ください。

編集後記

早いもので新年度が始まり3ヶ月がたちました。学生生活はいかがお過ごしでしょうか。本年度の大学院医学研究科には新入生修士課程24名、博士課程16名が入学され、新たな一步を踏み出されました。大学院事務担当も教務課：猿渡・林田、庶務課学位申請担当：田中・重松でみなさまのサポートに努めさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いたします。(林)

